

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPORT

2017.9. VOL.34

contents

極 研究&教育
Current topics in research and education

人 時の人
People in the news

和 お知らせ
Information

医学部附属病院手術室増設

進化し続ける名市大病院中央手術部

2017年4月に中央手術部の手術室が3室増えました。3室はそれぞれ特徴を備えており、今後さらに高度な医療を行えるようになっていきます。

①4K対応内視鏡手術室

近年の手術は患者さんに負担の少ない内視鏡による手術が増加しており、当院も非常に多くの内視鏡手術が行われております。この部屋には4K対応のモニターが設置されており、鮮明な画像でさらに安全に手術ができるようになりました。また、免震床システムを採用し、大地震の際には床の鋼板がスライドして免震効果を発揮します。災害時にも安全性も高い手術室となっています。

②ハイブリッド手術室

カテーテル室の機能を併せ持った手術室であり、X線透視装置やX線撮影装置と超音波画像を重ねることができる高度な機能を備えています。これにより、内科、放射線科、外科の共同手術が可能となりました。例えば、高度な血管内治療と手術を同時に行うことにより、安全性が高く身体に負担の少ない手術が提供できます。

その他にも、今後の医療の行方を見つめ、様々な工夫を行っています。例えば、画像システムもそのひとつです。画像システムもできる限り簡単な操作で、いくつもの画像情報を統合できるようになっており、タブレットをタッチするだけで、ひとつの画面に様々な情報を表示できます。チーム医療を推進するためには、職種間の情報共有は重要であり、新しいシステムはチーム医療に一役買っていることは間違いありません。

今後、名市大病院はより高度で先進的な医療を提供し、一方で患者さんに優しい病院であり続ける必要があります。中央手術部も、安心して手術を受けていただけるように、さらに進化を続けていきます。

中央手術部長 祖父江 和哉



4K対応内視鏡手術室



ハイブリッド手術室

“瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

連携病院

蒲郡市民病院

当院は平成9年10月に現在の蒲郡市平田町へ新築移転し、今年で20年となります。標榜診療科数は20診療科、許可病床数382床、常勤医師数50名(研修医8名含む)、常勤看護師数280名など総勢575名の職員で、東三河南部医療圏の二次医療を担う基幹病院として地域医療に貢献しております。

蒲郡市内には、入院可能な急性期病院が当院しかなく、蒲郡市民約8万人をはじめ周辺地域住民を含む約12万人の命を守る病院として、地元医師会と協力した開放型病床40床を持つという特色もありますが、急性期の治療から回復期の治療まで提供しております。

二次救急医療としては、『命を守る30分』というコンセプトのもと24時間365日救急患者さんの受け入れを行っており、救急搬送件数(時間内及び時間外)は28年度実績で3,139台であり、市内の救急搬送については、90%以上が当院へ搬送されております。また、時間外には28年度実績で14,387人の患者さんが受診されております。平日の時間内は、全診療科で協力しながら救急搬送患者さんの治療にあたっています。

急性期医療としては、放射線治療システム「Elekta Synergy®」を導入し、平成29年4月より稼働しております。また、集中治療室14床も完備しており、重篤な患者さんから高度な手術後の患者さんを受け入れております。手術室での手術件数は28年度実績で1,578件(うち、全身麻酔件数559件)でした。

また、平成27年7月30日付で「特定認定再生医療等委員会」に認定されました。このことは自治体病院としては全国でも初めてとなります。再生医療を提供するためには高度な技術やその安全性が求められるため、専門的な知識が必要となります。蒲郡市民病院に設置されました特定認定再生医療等委員会はこれまでに6回開催され、新規14件を含む、合計28件の案件を審査しております。今後は名古屋市立大学の御指導を受け、地元企業とも協力しつつ実際に再生医療も当院で実施していくこと、今まで築き上げてきた複数の企業との臨床研究も、一層進めていきたいと思っています。

一方、回復期医療として、高齢化率の高い蒲郡市においては、急性期を脱し、病状が安定してもすぐにご自宅等へ退院できない方も多くいらっしゃいます。そのような患者さんには地域包括ケア病棟で入院を継続していただき、MSWやディスチャージナースなどによりスムーズな退院支援をしております。

教育の面では、平成30年度から研修を開始する研修医の募集定員が2名から3名へ増員されました。当院は、高度急性期医療から在宅まで、また救急医療から老人医療まで症例も豊富でとても魅力的な病院です。中規模病院最大の利点、職種を超えた縦と横の繋がりのある当院。年に1度の病院祭では、全ての職員が一丸となって盛り上げています。他にも毎月の医局会での研修医症例発表会、毎週の早朝勉強会に加え、外部講師を招いての医師会との合同勉強会や市民公開講座などいろいろあり勉強の機会にもこと欠きません。今後は名古屋市立大学の多くの診療科の御指導を受け、ここ蒲郡でも最新の医療を提供していきたいと考えています。研修先を検討されている方は、ぜひ一度病院見学に来てください。

(蒲郡市民病院 病院長 河辺 義和)



教育

教員対象のFD(ファカルティ・ディベロップメント)を開催

カリキュラム改革に向けて熱い議論

2017年7月28日に臨床系講義と臨床実習に関するカリキュラム改革についての説明会と討論を行いました。多くの臨床系教員が集まりました。

現在、日本の医学部では国際的な医学教育基準に教育方法を合わせるべく、カリキュラム改革が進められています。本学も例外ではなく、より良い教育を提供すべく、改革を進めています。

今回は、主に来年からの4年生対象の臨床系講義に関する検討を行いました。講義のスケジュール、講義時間、アクティブラーニング(能動的学習)の導入等について情報交換を行いました。特に、アクティブラーニングをいかに取り入れるかについて、熱い熱い議論が交わされました。本学の教員の教育に対する情熱が伝わってくるミーティングでした。

このような努力は、さらに本学が優秀な医師を輩出することにつながっていくと信じています。

カリキュラム企画・運営委員会 祖父江 和哉



名古屋市立大学病院における専門医制度への対応

平成29年度にいったん見直しとなった新専門医制度ですが、日本専門医機構(以下、機構)による新整備指針が作成され平成30年度に開始の方向で準備が進められています。本当に間に合うのかと、当事者である2年目の研修医の先生は不安を抱えておられることでしょう。平成30年度開始が予定されているのは19の基本領域の専門医プログラムです。この制度の目的は、スーパードクターではなく「それぞれの専門領域で患者さんから信頼される標準的な医療を提供できる医師」の養成であり、機構により専門医としての能力が検証され認定されます。プログラムは各基本領域学会のプロフェッショナル・オートノミーにより一次審査が行われ、都道府県協議会と機構による地域医療への配慮が成された上で承認されます。基本領域では、原則「プログラム制」と呼ばれる一定の年次(3~5年間)で専門医を養成します。出産や介護などの場合は6カ月以内の中断は延長不要です。また基幹施設と連携施設から成る研修施設群の中で研修することが定められています。一方、サブスペシャリティ領域や基本領域の専門医取得後のダブルボードを取得する場合は、研修カリキュラムを作成し到達目標を達成した段階で専門医試験の受験資格が得られる「カリキュラム制」も許容されました。さらに基本領域研修中からのサブスペシャリティ領域の連動研修(並行研修)も可能となりましたので、これまでと同じ卒業年数でサブスペシャリティ領域専門医の取得も可能です。例えば、基本領域である内科専門医の研修期間3年間のうち2年間は循環器専門医研修と並行研修が可能です。

名市大病院では、基本19領域全ての専門医研修プログラムを用意しています。個々の希望するキャリアパスや、自身の習得ペースに合わせた柔軟性の高いプログラムを提供しています。連携施設で多くの疾患や手術、在宅を含めた地域医療を経験し、基幹施設である名市大病院では稀少疾患や高難度手術を経験し学会発表や論文作成の経験を通して研究マインドも習得していただきます。基幹・連携施設とも最低6カ月間の研修が必須ですが、それ以外は希望に合わせた研修病院を選べます。高度医療教育研究センター所属教員の在籍する名古屋市立東部医療センター、西部医療センターに加えて、名古屋市内外の大型基幹施設とも密接な基幹相互連携体制を組んで研修の質を担保しています。

初期研修終了後の数年間は医師としての能力が指数関数的に伸びる時期です。この時期に学んだ知識や技能は何歳になっても忘れることはなく、医師としての基礎となります。多くの指導医や同僚とは厚い信頼関係が形成され、困った時や悩んだ時の良き相談相手となるでしょう。総合研修センターでは、基本領域専門医からサブスペシャリティ専門医の取得、そして大学院進学までシームレスなキャリアパスをお手伝いさせていただきます。不安よりも、大きな期待を持って名市大病院専門医プログラムに飛び込んでください。

ご質問がありましたら、遠慮なく総合研修センター(s-kensyu@med.nagoya-cu.ac.jp)までお問い合わせください。写真のスタッフがお待ちしております。

病院長補佐(卒前・卒後教育担当)、総合研修センター 副センター長
飯田 真介



総合研修センターのスタッフ

研究室紹介

細菌学

日本人の死因の第3位は肺炎であり、感染症研究の重要性に異論を唱える人は少ないと思います。細菌学分野は、教授の長谷川以下、A群レンサ球菌を主な研究対象として活動を行っています。A群レンサ球菌は1990年頃より、再興感染症として認知されているヒト喰いバクテリア症ともよばれる劇症型感染症を引き起こす細菌として知られている細菌です。主に小児の咽頭炎を引き起こすごくありふれた細菌ですが、劇症型感染症は年々増加の一途をたどり、もはや稀な疾患ではなくなってきています。最近では西武ライオンズの投手コーチもこの疾患で急死されたようです。名市大病院救命救急センターでもその患者は認められ、病態の解明、より有効な治療法の開発が求められています。我々はこれまで劇症型感染症発症に重要な役割を果たすと考えられている多くの病原因子の解析を行うとともに、薬剤耐性のメカニズムとして従来の常識に一石を投じる研究成果を発表してきています。

学部教育においては、将来医師として感染症に実践的に立ち向かえることを念頭に講義、実習を行っています。さらに市立高校生を対象とした体験実習、名市大病院においては、中央臨床検査部微生物検査係と共同して、病院で分離される様々な病原細菌の臨床微生物学的解析、また院内感染対策活動も行っています。

このように我々の分野はいわゆる乳酸菌や納豆菌といった細菌の研究は行っておりませんが、感染症研究は耐性菌の問題もあり、決して軽視できない分野であり、その基礎となる病原細菌の研究を通して社会に貢献しています。



後列左から井坂学内講師、松井臨床検査技師、立野講師
前列 長谷川教授

研究室紹介

分子毒性学

設置から現在まで

当研究室は2003年に日本ではじめて医学部大学院に設置された毒性学分野です。津田洋幸(元国立がんセンター研究所化学療法部部長、現本学特任教授)が初代教授として赴任し(2003~2008年)、その後、酒々井眞澄(前岐阜薬科大学教授)が着任しました(2010年~)。現在のメンバーはスタッフ4名(教授 酒々井眞澄、准教授 二口充、講師 深町勝巳、技術職員 吉本恵里)、博士課程大学院生2名、研究員5名、学部生5名(基礎自主研修の学部3年生)です。過去7年間での博士課程修了者4名、修士課程修了者6名、研究員での論文博士取得者1名です。

毒性学の社会的役割

化学物質は多くの利便をもたらす一方で、その使用法によっては健康に有害な影響を及ぼすことがあります。有害性を予測し評価するのが毒性学です。私たちのミッションは化学物質の発がん性、生殖発生毒性、遺伝毒性、免疫毒性および一般毒性について毒性発現機序をつきとめリスク評価を行うことにより化学物質のリスク管理に役立つ情報を社会に送り出すことです。なかでも、発がん性および遺伝毒性についての正確なリスク評価は極めて重要です。

研究

医科学にもとづく系統的な方法論による環境物質の発がん性評価に重点をおき研究を進めています。具体的には、ナノ材料の肺発がんリスク評価システムの構築、化学物質の標的分子(*in silico*予測毒性学を含む)の探索、発がん高感受性遺伝子改変動物の作製を行っています。発展的な研究としてリガンド・レセプタに関する情報をもとに毒性の軽減をめざした抗がん剤の開発に取り組んでいます。



前列左から深町講師、酒々井教授、二口准教授
後列左から磯田君(2014年修士修了)、松本君(博士課程)
沼野君(2014年博士修了)、吉本君(技術職員)
安藤君(博士課程)、森脇君(2012年修士修了)

新任教授のご紹介

心臓血管外科分野 — 須田 久雄 教授

この度、2017年4月1日付けで心臓血管外科(成人診療担当)教授を拝命しました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は昨年地震で甚大な被害を受けた九州・熊本で生まれ育ち、1985年に佐賀医科大学(現佐賀大学医学部)を卒業後、北部九州(佐賀、福岡、長崎)で3施設の心臓血管外科の新規開設に携わりました。2009年に東部医療センター(当時の東市民病院)での心臓血管外科開設を機に初めて名古屋の地に参りました。東部医療センターでは、副院長として地域医療連携・経営戦略の勉強の機会を頂き、2015年7月から大学で成人心臓血管外科を担当しております。

臨床の専門は、虚血性心疾患、弁膜症といった成人心臓血管外科全般を担当しており、なかでも動脈瘤破裂や急性大動脈解離といった大血管疾患の緊急手術を専門としています。2017年4月から大学の手術室に最新のハイブリッド手術室が稼働を開始し、動脈瘤に対するステントグラフト治療に積極的に取り組んでおります。さらに循環器内科と共に弁膜症に対するカテーテル治療、重症心不全に対する人工心臓といった最先端の治療に取り組んでいく所存です。研究面では大動脈解離の病態解明と治療法の開発、3Dプリンターによる心臓模型を用いた教育システムの開発を進めております。

今後はひとりでも多くの同門の若手外科医を育成することで、外科医としての最後の仕事場を与えていただいた本学への恩返しをしたいと念じております。今後とも皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくご挨拶申し上げます。



須田 久雄 教授

新任教授のご紹介

形成外科分野 — 鳥山 和宏 教授

私は、2015年3月に名古屋市立大学病院に形成外科科長として赴任させて頂き、2019年4月1日より名古屋市立大学形成外科教授を拝命いたしました鳥山和宏と申します。

1989年(平成元年)に名古屋市立大学を卒業し、中部ろうさい病院で研修後に形成外科を選択して名古屋大学形成外科に入局しました。名古屋大学形成外科には20年余り勤務して、頭頸部腫瘍、乳癌、骨軟部悪性腫瘍の切除後の再建手術をはじめ、小児の形成外科、手や顔面の外傷の治療などに携わってきました。また、3年間はいち小児保健医療総合センターに赴任し、あざのレーザー治療をはじめ多くに体表面の先天異常の治療を行って参りました。

赴任した2015年からは、人工物や自家組織による乳房再建、マイクロサージャリーを利用した頭頸部再建、小児の体表面の先天異常を中心に多くの症例を経験させて頂いております。まだまだ手術件数は多くはございませんが、先生方のお役に立つことができますように、精進努力してまいります。

研究は、自家培養表皮の臨床応用に長らく取り組み、本年8月より「白斑・改善が困難な癒痕・難治性皮膚潰瘍に対する培養表皮移植の有効性の検討」と題する臨床研究を(株)ジャパン・ティッシュ・エンジニアリングの共同で開始しました。教育は、学生および研修医に、よりきれいな傷あとを目指しての縫合(表皮縫合・真皮縫合)の理論と実習を、また、顕微鏡下で血管吻合(マイクロサージャリー)のやり方を指導しております。

現在、助教佐藤医師と臨床研究医恒川医師の3人で診療・研究・教育を行っており、至らぬ点多々あるかと存じますが、今後ともご指導の程よろしくご挨拶申し上げます。



鳥山 和宏 教授

新任教授のご紹介

小児泌尿器科分野— 林 祐太郎 教授

2017年4月1日付けで、新設されました名古屋市立大学大学院医学研究科 小児泌尿器科学分野の初代教授(診療担当)を拝命致しました。皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私は1985年に名古屋市立大学を卒業し、泌尿器科学教室に入局しました。1993年に郡 健二郎先生が教授として着任され、私は故大田黒和生前教授の後を継いで小児泌尿器科の道を歩むことになりました。

小児泌尿器科は泌尿器科の専門領域の一つで、おもに腎・尿路・生殖器の先天異常を持つ小児の手術治療を行う部門です。小児期の手術を行うだけでなく、患児たちの将来に渡っての腎機能・生殖機能・排尿機能・性機能を守る成育医療も担当しております。

しかし小児泌尿器科の手術は繊細な技術を要する再建術ですので、独学での修練には限界があり、1998年にUCLAの小児泌尿器科センターに留学しました。幸か不幸かカリフォルニア限定の医療ライセンスを取得できたので、レジデントと一緒に朝6時から病棟回診し、7時～夕方までチームの一員として手術に従事しました。それまでは手術書でしか見たことのない様々な小児泌尿器科の手術を経験しました。

帰国してからは小児泌尿器科のグループ作りに着手し、現在は9名のメンバーが県内で小児泌尿器科などの診療・研究活動を行っています。

はからずもこの度、第26回日本小児泌尿器科学会の会長を拝命し、2017年7月5日(水)から7日(金)まで、「夢の階(きざはし)、明日への棧(かけはし)」をテーマとして学術集会を開催しました。国内の医学研究科で初めて開設された小児泌尿器科学分野の船出を参加者の皆さんが祝って下さいました。

最後に、小児泌尿器科学分野の教室運営を通じて、臨床・教育・研究・経営の観点から名市大の発展に微力ながらも貢献したいと存じます。どうか皆様のご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



林 祐太郎 教授

新任教授のご紹介

医療安全管理学分野— 戸澤 啓一 教授

平成29年4月1日付けで医療安全管理学分野の教授を拝命いたしました。

私は昭和62年に本学を卒業し、故大田黒和生教授が主催されていた泌尿器科に入局しました。

以後、精力的に先進的医療としての腹腔鏡手術およびロボット手術の導入とともに、尿路性器腫瘍の転移や尿路結石症に関する基礎研究を行ってまいりました。

このような日々、手術と研究という大学での業務のなかで、平成17年に医療事故防止等検討委員会の外科系委員に任命されました。これが、私と医療安全の出会いです。平成21年からは名古屋市立大学病院の医療安全管理室副室長として、毎週の医療安全管理室ミーティング、月1回のセーフティマネージャー会議、医療安全管理委員会を通じて、医療事故の再発防止に取り組んでまいりました。また、ジェネラルマネージャーとして、年2回の重大事例報告会、医療事故防止講演会、新規・中途採用者研修会などで、リスクマネジメントについて、院内全体に啓発を行ってまいりました。この結果、病院機能評価をはじめ毎年の医療監視、特定共同指導などで、医療安全管理室は、特に高い評価を受けることができました。

名古屋市立大学病院では、この十数年で、インシデントレポートの報告数、医療事故防止のためのシステム改善、医療事故対応の迅速化など、医療安全に関して、多くの改善と進歩がみられています。今後は、これまでの経験を生かして、名古屋市立大学病院の患者さん、職員全員が安心できる職場作り、システム構築に努めてまいりたいと思います。



戸澤 啓一 教授

学生生活

川澄祭を開催

第58回川澄祭実行委員長を務めさせて頂き、医学部4年の渡邊大起と申します。今年は11月3日から5日の3日間に川澄祭を開催させて頂きます。開催にあたり、医学部同窓会の皆様や当キャンパスの教職員の方々に格別のご理解とご協力を賜りましたこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本年度のテーマは、「Make Especial Days」です。川澄祭に来場して下さった皆様にとって、特別で素敵な1日となりますように。そしてテーマの頭文字をとりMED (medicalの略称)と表現することで、医療・医学 (medical) をもっと身近なものと感じて頂きたいという2つの想いが込められています。

先輩方に誘って頂き1年生から川澄祭に関わらせてもらっていますが、僕たち4年生が川澄祭の運営に携わるのは今年が最後となります。最後の川澄祭で実行委員長を務めさせて頂くことを心から嬉しく思います。歴代の先輩方が築いてきた川澄祭の雰囲気や尊重し、学内全体の士気を高め、最高の川澄祭を作り上げるために全力を尽くしていきたいと思っております。実行委員一同、皆様のご来場をお待ちしております。



実行委員のみなさん

医学部1年生の学生生活を紹介します

名古屋市立大学に入学して4ヶ月が経ちました。医学の専門教育はまだなく、1年生の講義は一般教養が中心です。一般教養は数学、英語などの必修科目と選択科目に分かれています。選択科目には経済学、社会学、芸術学などがあり、教授が自身の専門分野をどの学部の子にも分かりやすいように講義して下さいます。私は自分の興味が向いた講義を選択しましたが、その中で「宇宙のなりたち」という講義を紹介します。この講義では講義の一部として名古屋市科学館に行きました。世界最大のプラネタリウムを見た後に、学芸員の方からプラネタリウムの仕組みを教えてくださいました。これは他では学ぶことができない特別な講義なので、この講義を受けることができたと感じています。

また、医学生は部活、サークル、アルバイトなどに積極的に励んでいます。特に部活では医学部生だけの大会である「西医体(西日本医科学生総合体育大会)」での活躍を1つの目標としています。私はテニス部に入っていますが、今年の西医体は応援での参加でした。来年はレギュラーとして出場できるよう練習に力を入れていきます。



西医体(テニス部)

医学部1年 吉田 拓磨

6月24日(土)に名古屋市立大学蝶ヶ岳ボランティア診療班創設20周年記念講演会・壮行会を開催

今年の壮行会の注目は「名古屋市立大学蝶ヶ岳ボランティア診療班創設20周年記念講演会」です。蝶ヶ岳ヒュッテオーナーの神谷圭子様と太田伸生医師(本学医動物学講座教授(当時)、初代診療班代表)の発足当時のお話は時折笑いも誘いながらの大変興味深いものでした。当初は少人数のメンバーが強い意思と使命感を持って診療班の立ち上げにご尽力された様子がわかります。今では学生部員が約100名と医療スタッフ60~70名により診療所開所期間中に130~200名の患者診療を担うまでに成長しました(20年間で約2,800名の診療実績)。私たちの活動の様子は新聞やテレビでも取り上げられ、大変意義のある取り組みであると認められるようになってきました。この活動は安全を最優先にしており、教育・研究・社会貢献の実践の場でもあります(酒々井眞澄現代表挨拶)。私は20年を経て蝶ヶ岳ボランティア診療班をさらに盛り立てていけるように、次の世代に今回感じた思いを伝えていきます。私たちの診療班が末永く続きますように、願いを込めて。



20周年おめでとう! 今後もどうぞよろしくお祈りします。

看護学部学生代表 白木 伶奈

上田龍三名誉教授が紫綬褒章を受賞

2017年4月に春の褒章が発令され、本学名誉教授かつ元病院長、そして初代名古屋市病院局長であられる上田龍三先生が紫綬褒章を受賞されました。上田先生は1969年に名古屋大学医学部をご卒業され、名古屋大学第一内科を経て、1976年からニューヨークのスローン・ケタリング癌研究所に留学されました。そこで腫瘍免疫学の世界的権威であるロイド・オールド博士に師事し、がん抗原に対するモノクローナル抗体の開発に従事され、1980年の帰国後は愛知県がんセンター研究所化学療法部で研究を続けられました。1995年に本学第二内科学講座教授に就任され、大学院生とともにがん免疫療法の開発に情熱を注がれました。当時標準治療が存在せず極めて予後不良であった成人T細胞性白血病・リンパ腫細胞の表面に、ケモカイン受容体CCR4が強発現していることを見出されました。抗腫瘍効果を高めた産学共同研究による改変抗CCR4モノクローナル抗体を用いたトランスレーショナルリサーチ (TR) を実践され、その成果をもとに臨床開発の指揮を執られました。その結果、この薬剤「モガムリズマブ」は2012年に国内での製造販売承認を得て、臨床現場で多くの患者さんに福音をもたらすことが出来ました。今では、固形がん患者さんを対象とした臨床治験も国内外で進行中です。産官学共同研究としての一連のTRの功績は、我が国における医薬品開発のモデルとみなされています。これも上田先生の魅力的なお人柄と強いリーダーシップに基づく成果であり、私ども後進にとりましても誇らしい限りです。上田先生におかれましては、2012年より愛知医科大学腫瘍免疫寄付講座を興され、現在もがん免疫療法研究をライフワークとして日々精力的にご活躍されております。今後も益々のご活躍とご健康を祈念いたします。



血液・腫瘍内科学分野 伊藤旭、飯田真介

産科婦人科学 杉浦真弓教授が中日文化賞を受賞

荣誉ある賞を受賞することができ大変光栄に存じます。支えてくださった皆さん方に心からお礼を申し上げます。

本学産科婦人科には約40年の習慣流産・不育症研究の伝統があります。不育症とは、妊娠はするけれど流産、死産によって子が得られない疾患です。

私自身は27年間研究に携わってきました。原因の一つである染色体均衡型転座保因者は自然妊娠でも68%が産産できることを示し、世界中で増加の一途をたどる着床前診断に歯止めをかける役割を果たしました。胎児染色体数異常が最も高頻度な原因であり、41%を占めることを世界で初めて明らかにしました。これらの成果は不育症の標準的診療確立に貢献し、昨年カンヌで開催された第1回国際不育症学会で基調講演を担当しました。一昨年、本学の不育症研究センターは文部科学省「不育症・ヒト生殖メカニズム解明のための共同研究拠点」に認定されました。

不育症研究にとどまらず、「妊娠適齢期」の啓発活動を継続的に行いました。これらの貢献を学術面のみならず、社会的にも高く評価していただきました。今後ともさらに質の高い研究を推進したいと思います。ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



ひとこと☆メッセージ募集!

本誌では、皆様からの一言メッセージを募集します!無沙汰している同級生に、恩師に…ワイワイ楽しいお便りお待ちしております。ほっと和む「名市大人のつぶやきコーナー」をみなさんと作りたくと思います。

例えばこんな一言を、

研究者紹介に載った同期・先輩へ。「おまえも、がんばってるみたいやん。」
 ごぶさたしている同窓生への近況を。「最近、腹が出てきました。」
 新米医師のつぶやき、女性医師必見!ウチの家事両立法!「ここが手抜きポイント!」
 などなど、必要事項を記入の上、葉書かe-mailで下記までお送りください。(注:次回掲載は1月号です)

1.一言メッセージ(30字以内) 2.卒業年度 3.お名前(ふりがな) *匿名希望またはペンネームでの掲載をご希望の場合はその旨をお書きください。*4.住所 5.電話番号またはE-mailアドレス

《受付》〒467-8602 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地 名古屋市立大学 医学・病院管理部 経営課経営係 広報担当宛 E-Mail:hotnews@med.nagoya-cu.ac.jp

お送りいただいた個人情報については、お便りの採用に関する応募者への問い合わせ、確認以外の目的で使用いたしません

広報誌：瑞医(ずい)
 発行：〒467-8602
 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地
 TEL(052)858-7114 FAX(052)858-7537

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp/>

※次号の発行は平成30年1月下旬発行予定です。[年3回 1月・5月・9月]

☐
 我こそは
 通信員!

広報誌「瑞医」へ最新の話題をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、E-Mail:hotnews@med.nagoya-cu.ac.jp
 |医学・病院管理部経営課経営係 広報担当まで